第71回　島根県神社関係者大会

9月14日　於　出雲市民会館

奉祝　天皇陛下御即位第71回　島根県神社関係者大会

島根県神社庁報

第344号
島根県神社庁
〒699－0701
出雲市大社町杵築東286
TEL　0853-53-2149
FAX　0853-53-2582

宣　言

畏くも天皇陛下におかせられては、天津日嗣の随に践祚遊ばされ、誠に慶賀にたえない。

ここに県民挙げて奉祝を申し上げ、皇室の弥栄を祈念するものである。

上皇陛下におかせられても、三十年に亘り広大な御仁慈を垂れ給い、常に篤き大御心を国民にお寄せ遊ばされたことは賢き極みである。

また、本宗と仰ぐ神宮におかれては、第六十二回神宮式年遷宮後五年以上経過も、なお高い参宮気運を維持していることは、ご同慶の至りである。

さて、本年は我国にとって、また神社界にとっても大きな節目の年であり、国民挙って御代替を奉祝する気運に満ち溢れている。このような時こそ皇位継承の諸儀式を通じて、皇室と神宮、神社との深い結びつきが、更に広く県民に再認識されるよう努めなければならない。

新帝陛下御即位の年という節目の大会にあたり、関係者一同は、なお一層一丸となって次の目標実現に向け努力していきたい。

一、天皇陛下御即位の年を寿ぎ、皇室敬慕の念の喚起につとめる。
一、神宮奉賛の誠を捧げ、神宮大麻の頒布推進につとめる。
一、祭祀の厳修と神社の尊厳護持に万全を期する。
一、護国の英霊に慰霊と感謝の誠を捧げるため、参拝勧奨を図る。
一、家庭祭祀の振興と、今に生きる日本人の心の教育につとめる。

右、宣言する

令和元年九月十四日

奉祝 天皇陛下御即位　第七十一回 島根県神社関係者大会

第七十一回島根県神社関係者大会報告

総務委員長　後藤和彦

奉祝　天皇陛下御即位　第七十一回島根県神社関係者大会が九月十四日出雲市「出雲市民会館」を会場に県内各地から神職、氏子総代等神社関係者、千名余りが参加し開催された。

午前十時に斎主角河和幸庁長以下祭員、伶人、典儀に依り祭典。舞姫を女子神職、奏楽を神道青年協議会に依り浦安の舞を奉仕し奉祝祭終了。十一時からの式典では、神宮並びに県内各奉務神社遥拝に始まり、国歌斉唱、敬神生活の綱領唱和、物故神職並びに物故神社関係者に対しての黙祷。続いて、角河和幸島根県神社庁長、木佐明宏島根県神社総代会長がそれぞれ挨拶をした。顕彰、表彰の部では、神宮大麻頒布優秀支部として出雲支部、江津支部が表彰され、特別表彰頒布優良奉仕者として出雲支部　那賣佐（なめさ）神社武田敦隆宮司、又、頒布優良奉仕者として大原、飯石、那賀支部の各宮司が表彰された。

続いて、神社庁長表彰では、九名の神職功績者表彰、二名の神職功労者表彰があり、続く氏子功労者表彰では、各支部の五十四名もの方々が表彰された。神社本庁統理感謝状は、二神社の氏子一同、島根県神社庁長感謝状は、団体を含め百十八名に贈られた。

来賓を代表して神社本庁統理代理吉川通泰副総長、続いて神宮大宮司代理木本雅文祢宜、島根県知事丸山達也様よりご祝辞をいただいた。続いて、本大会に臨席いただいたご来賓の方々の紹介並びに祝電の披露があった。そして被表彰者を代表して松江支部　神魂神社吉野光徳氏子総代が謝辞を述べた。最後に大会宣言案を三谷真一島根県氏子青年協議会会長が宣言し、満場一致の拍手で採択され、角河和幸庁長の発声により聖寿の万歳を三唱し、式典を終了した。

昼食休憩の後、出雲、隠岐、石見各地

奉祝祭

浦安の舞奉納

区の神楽上演に移り忌部正孝副庁長が神楽社中を紹介。出雲地区は佐蛇神能保存会による「日本武」、隠岐地区は島後久見神楽による「神途舞」「湯立」、石見地区は神和会による「塵輪」が上演された。

佐陀神能保存会

出雲の演目、日本武命が倭姫命より天叢雲剣と燧石を授かり東夷を退治する『日本武』。

島後久見神楽

隠岐の演目、神女が苦心の結果、探湯により清明を証拠立てる『湯立』。

石見神楽神和会

石見の演目、天皇自らが悪鬼退治をされた内容の『塵輪』。

それぞれの神楽社中の舞や豪華な衣装を堪能し、大会を無事成功裡に終えた。

国民精神昂揚研修会報告
（併三部合同教化会議）

教化委員長　牛尾　充

国民精神昂揚研修会（併三部合同教化会議）が七月三十日、島根県神社庁大会議室を会場に開催された。例年では島根県神社関係者大会に合わせて開催されるが、本年は関係者大会において御代替りに伴う奉祝行事等行うため、三部合同教化会議に併せ開催された。

午後一時三十分からの開会行事では、神殿拝礼に始まり、国歌斉唱、敬神生活の綱領唱和が行われ、続いて角河和幸庁長が挨拶した。次に出雲・石見・隠岐各部会より教化活動報告が行われ、日頃の教化活動の概要並びにその課題等を皆で共有し、開会行事を終えた。

続く研修では、第一講に錦田剛志先生（立虫神社・万九千神社宮司、島根県神社庁参与、島根県神社庁研修所講師）を迎え、「皇位継承～平成から令和へ～」と題して、映像を交え大嘗祭の基礎的な部分を大変わかりやすく講義いただいた。

第二講では、岡田荘司先生（國學院大學大学院客員教授、國學院大學研究開発推進機構客員教授）を迎え、「一代一度大嘗祭について」と題して講義いただき、大嘗祭の概要や今後行われる行事、神事の流れ等を詳しく講義いただいた。

講義の要旨は次の通りである。

古く新嘗祭は、豪族・農民の間で秋の収穫祭として各自で行われていたが、天皇自らの祭（親祭）として、国家的儀式に格上げしたのが、天皇一代一度の大嘗祭である。

大嘗祭の成立は、古代律令国家の形成期にあたる七世紀後半、天武天皇と持統天皇の時代であり、壬申の乱という国家を二分する争乱のあと、人心の安定と国家の安寧が祈念された。

大嘗祭の主要儀式の始まりは、国郡卜

定（斎田定点の儀）である。地方の国々の中から、亀甲を焼いて卜定し、稲穂を収穫する田圃を決めた。この稲穂を用いて御飯・御酒を神に供えた。毎年の新嘗祭は、古代において、畿内（都周辺の奈良、京都、大阪の地域五ヶ国）の天皇の食膳を用意する直営田から稲穂が用意されたが、大嘗祭では畿外の諸国から求められ、地域の人々がこれに協力した。近世になると近江国（滋賀県）と丹波国（京都府）に固定したが、郡を替える卜定が行われた。

東京で行われる現代においては、日本列島の稲作地帯の中から新潟県・長野県・静岡県を境に、東日本とそれ以外の西日本とに分けて田圃が選ばれる。

その斎田の農耕者を「大田主」といい、二つの地域の稲の生育を待ち、秋になると天皇の使いである抜穂使が遣わされ、稲穂を収穫する。これが祭儀の時神様のお食事である神饌と天皇がいただく直会の料に用いられる。大嘗祭においては神饌だけではなく様々なものが奉られる。衣食住、又、大嘗祭の神事の流れを以下にしるす。

◎奉られる「衣食住」

・「住」

大嘗宮（悠紀殿、主基殿、御厠、膳屋、臼屋）、廻立殿

皇居（宮城）内に建設される仮設の祭祀空間＝華美でなく素朴なつくり

柱（製材されてない黒木）、壁（ムシロ）、屋根（茅葺き）

古代は悠紀、主基国の人々が祭祀七日前に着工し、二日前に完成、祭祀翌日には取り壊した。

・「衣」

繒服（にぎたえ＝絹織物）・麁服（あらたえ＝麻織物）ほか

古代ニギタエは三河国（現愛知県）が、アラタエは阿波国（現徳島県）の忌部氏が供納

・「食」

悠紀・主基国供納の新穀より作られた御飯・御粥・御酒（白酒・黒酒）の他に生物（加熱していない海産物四種）、干物（加熱・乾燥した海産物四種）、鮑汁漬（あわびのしるひじ）・海藻汁漬（めのしるひじ）、果物（木の実など四種）など

枚手（ひらて）・窪手（くぼて）＝柏の葉を編んでつくる食器などを用いる

◎大嘗祭の神事の流れ

・廻立殿（かいりゅうでん）にて御湯浴、潔斎、御祭服に着替える。

・悠紀殿に出御

・神饌行立（しんせんぎょうりゅう）神饌の品々が悠紀殿に運ばれる。

・御手水

・供饌（祭神に奉る）

・御拝礼、御告文

・直会（天皇も召し上がる）

・撤饌

・廻立殿へ還御
（主基殿にて同様の作法をもう一度繰り返す）

○天皇は、中央の寝座には手を触れず、南東に向かい、神饌を供える。
南東＝平安京のある京都から見て伊勢神宮（天照大神が坐す）の方向
（東京で行う大嘗祭では南西の方向）

＊中央の寝座は、神への供え物（衣服、御衾、御沓、櫛、扇、打払布）

毎年の新嘗祭（十一月二十三日）は宮中三殿の西にある神嘉殿において、同じ儀式を二度繰り返し、夕膳と暁膳を差し上げる祭儀である。その源流は農民の稲作収穫を感謝する儀式に由来し、奥能登で行われている田ノ神饗応の「アエノコト」は、農民の素朴な民俗行事として世界無形遺産に登録されている。

大嘗祭は新嘗祭の規模を拡大し、一代一度、徹底して心身を清め清浄の中で、皇祖天照大神と全国の神々に新穀の神膳を捧げ、国家の安寧と国民の幸せを祈念する国家規模の「アエノコト」と言えるものである。

この第二講終了後、岡田・錦田両先生がご登壇され講義のまとめ、質疑応答があり、その後教化委員長の牛尾よりの謝辞の後、閉会となった。

今回の研修では、今後行われる祭事の意味や流れ等、神職として知っておかなければならないことを詳しく講義いただき、大変実りある研修となった。

権正階・直階 階位検定講習会を終えて

去る八月二日（前期）より約一ヶ月間に及ぶ階位検定講習会が島根県神社庁を会場に開催された。

八月二十九日に閉講式（後期）を行い、修了生より次のとおり謝辞が述べられた。

謝辞

僭越ながら、修了生を代表して御礼のご挨拶をさせていただきます。

この度、直階十五名・権正階十七名が講習会に参加させていただきました。参加者は年齢も出身も様々ですが、とりわけ会社勤めの者にとって、約一ヶ月間もの休暇を取ることは至難の業で、それだけに島根県神社庁の前期・後期分割開講のお取り計らいは、本当に有難いものでございました。

いざ、講習会が始まりますと、今年も容赦のない猛暑が続く中、神社庁の皆様をはじめ、講師の先生すべての方々から、「体調の悪い人はいませんか」「冷房が効きすぎて寒くないですか」等、家族のよ

うに優しいお言葉やご配慮を賜りました。本当に感謝の言葉もございません。

講習は、座学も実技も妥協のない厳しいものでしたが、直階・権正階共に力を合わせて乗り越えてまいりました。時には、悩んだり、音を上げそうになったりもしましたが、そこには常に、神職として正しい生き方を身に付けてほしいという先生方の熱く、真摯な思いが込められていることに気が付きました。はたして、自分達はその思いにどれほど応えられただろうかと自問いたしますと、残念ながらまだ至らない所がたくさんあるように思います。

今回の講習会で教えていただいたことを真に自分のものにするため努力を続け、将来奉職する神社でそれを実践することが、ご恩に報いるために私達のできる唯一の方法だと肝に銘じております。

この度は、本当に有難うございました。

令和元年八月十四日

修了生代表　小林賢一

修了生名簿

直階（甲）

西山彰
伊藤真寿美
山本ソレンセン貴子
諏訪邊文則
宮川龍哉
稲田知香子
東浦克昌
田湯紳司
花田英久
加藤慎基
上野歳貴
田邊実可子
末岡正次
西川怜香
木森正浩

権正階（乙）

佐久間文男
金本壮康
河崎真
鳥屋尾絹枝
山本滋比古
野田武大
八谷秀幸
小林賢一
朝山亮子
那須正嗣
田平好香
宇津巻笙平
倉田政徳
渡部悦子
森山晴朗
奴賀鈴乃
田坂尚之

謝辞

僭越ながら、修了生を代表して御礼のご挨拶をさせていただきます。

第一二六代今上陛下には践祚遊ばされ、御代替りにあたって、数多くの諸儀式が粛粛と執り行われておりますこと、お慶び申し上げます。

平成から令和に替わった佳節の年に、この島根の地で、権正階講習生十四名直階講習生十八名が学び、講習会を終了することができたことを光栄に思います。

これも偏に温かいお心遣いをいただいた角河庁長をはじめとする島根県神社庁の皆様と様々な知識や考え方を惜しみなく私達に授けていただいた主任講師の石原先生をはじめとする講師の先生方のお蔭と心より感謝申し上げます。

講習会へは、県内県外から幅広い年齢層の講習生はそれぞれの決意をもって参加しました。期待と不安で緊張していましたが、同じ志を持つ同士として、心を一つに日々勉学に勤しみました。この長い期間支えてくれていた家族のことを思えば、今後の奉仕にこの講習会での学び

が役立てられるかと楽しみでもあります。

私にとりまして、この度の講習会の学びは、自分の生い立ちの中であたりまえであったことが実は神道人としてとても大事であることに気付いたり感激したり、新たな発見もあり、感服しきりでございました。講習生ひとりひとりの胸に刻まれた学びや発見を持ち帰り、今後の神明奉仕に活かし、倦まず弛まず神職としてひたすら神明奉仕する背中を見せてまいる所存でございます。

結びに、講師の先生方、また島根県神社庁の皆様には、呉々も切に御身お労りくださいまして、益々ご活躍ご発展なさいますように幾重にもお祈り申し上げます。

彌栄。

令和元年八月二十九日

修了生代表　渡部悦子

修了生名簿

直階（乙）

宗像廾博
東浦克昌
脇山圭
中林司
西川怜香
木森正浩
稲田知香子
伊藤真寿美
末岡正次
山本ソレンセン貴子
宮川龍哉
加藤慎基
西山彰
上野歳貴
田邊実可子
諏訪邊文則
田湯紳司
花田英久

権正階（甲）

髙田憲清
渡部悦子
森山晴朗
那須正嗣
宇津巻笙平
佐久間文男
八谷秀幸
河崎真
野田武大
倉田政徳
伊尾浩輔
奴賀鈴乃
山本滋比古
田坂尚之

神宮大麻暦頒布始奉告祭

九月二十五日神社庁神殿において神宮大麻暦頒布始奉告祭が角河庁長外役員支部長参列のもと斎行された。

祭典奉仕者

斎主　佐藤美彦（飯石）
祭員　三戸太貴（飯石）
奏楽　巨勢佳史（飯石）
奏楽　小田英夫（飯石）
典儀　牛尾　充（浜田）

御大礼の儀式と行事

夏から秋まで

- 大嘗宮地鎮祭
- 斎田抜穂前一日大祓
- 斎殿抜穂の儀
- 悠紀主基両地方新穀供納

10月

- 即位礼当日賢所大前の儀（22日）
- 即位礼当日皇霊殿神殿に奉告の儀（22日）
- 即位礼正殿の儀（22日）
- 祝賀御列の儀（22日）
- 饗宴の儀（22、25、29、31日）

11月

- 神宮に勅使発遣の儀（8日）
- 大嘗祭前二日御禊（12日）
- 大嘗祭前二日大祓（12日）
- 大嘗祭前一日鎮魂の儀（13日）
- 大嘗祭前一日大嘗宮鎮祭（13日）
- 大嘗祭当日神宮に奉幣の儀（14日）
- 大嘗祭当日賢所大御饌供進の儀（14日）
- 大嘗祭当日皇霊殿神殿に奉告の儀（14日）
- 大嘗宮の儀（14～15日）
- 大嘗祭後一日大嘗宮鎮祭（16日）
- 大饗の儀（16、18日）

即位礼・大嘗祭の後

- 即位礼及び大嘗祭後神宮に親謁の儀
- 即位礼及び大嘗祭後神武天皇山稜及び昭和天皇以前四代の天皇山稜に親謁の儀
- 茶会
- 即位礼及び大嘗祭後賢所に親謁の儀
- 即位礼及び大嘗祭後皇霊殿神殿に親謁の儀
- 即位礼及び大嘗祭後賢所御神楽の儀
- 大嘗祭後大嘗宮地鎮祭

奉納品

浄衣
夏物２領
出雲部会奉納

浄衣１領
石見部会奉納

表着
夏物１領
令和元年講習生

浄衣
夏物１領
隠岐部会奉納

ご奉納ありがとうございました

氏青定期大会

令和元年九月七日㈯

安来市伯太町「わかさ会館」において母里氏子青年会が主管の下、「奉祝　天皇陛下御即位　第五十六回島根県氏子青年協議会定期大会」が行われた。

本大会に先立ち研修では、伯太川に場所を移し約三十名が恒例の禊を行い、その後八幡宮において正式参拝に併せ、天皇陛下御即位の奉祝記念植樹を行った。

本大会では、島根県神社庁理事　後藤和彦様らを来賓に迎え盛大に行われた。

第七十回 全国敬神婦人会 広島大会開催

九月十一日、十二日第七十回全国敬神婦人大会広島大会が「広島市文化交流会館」を会場に開催された。

敬神婦人出雲部会、石見部会から四十五名の参加があった。

大社國學館入学案内

詳細は直接大社國學館までお問い合わせ下さい。

《所在地・照会先電話番号》

大社國學館
〒699-0701　島根県出雲市大社町杵築東283
電話　0853－53－2020

《募集人員》

普通課程Ⅱ類（本科生）　15名
同　（選科生）若干名
予　科（別科生）若干名

《入学試験・内容》

- 第１次　令和２年２月20日（木）
- 第２次　令和２年３月21日（土）
- 第３次　令和２年４月10日（金）

筆記試験（国語・国史・作文）及び面接

《出願手続締切》

- 第１次　令和２年２月15日（土）
- 第２次　令和２年３月16日（月）
- 第３次　令和２年４月５日（日）

神職任免

（令和元年八月一日～十月十八日）

任免	発令月日	奉職神社名	鎮座地	兼務	職名	氏名
任	1・8・1	大日霊神社	益田市木部町	本	祢宜	田中愼一郎
任	1・8・1	八幡宮	益田市金山町	兼	〃	〃
任	1・8・1	八幡宮	益田市西平原町	兼	〃	〃
任	1・8・1	三剣神社	益田市金山町	兼	〃	〃
免	1・8・19	大森神社	雲南市木次町	本	祢宜	小林　正治
免	1・8・19	國玉神社	雲南市木次町	兼	〃	〃
免	1・8・19	王守神社	雲南市木次町	兼	〃	〃
免	1・8・19	蛭子神社	雲南市木次町	兼	〃	〃
免	1・8・19	古森神社	雲南市木次町	兼	〃	〃
免	1・8・19	大森神社	雲南市木次町	兼	権祢宜	晴木　茂夫
任	1・8・20	〃	〃	兼	祢宜	晴木　邦幸
任	1・8・20	國玉神社	雲南市木次町	兼	〃	〃
任	1・8・20	王守神社	雲南市木次町	兼	〃	〃
任	1・8・20	八幡宮	江津市有福温泉町	兼	祢宜	門屋　承
任	1・8・20	八幡宮	江津市波子町	兼	〃	〃
任	1・8・20	金刀比羅神社	江津市有福温泉町	兼	〃	〃
任	1・8・20	大元神社	江津市千田町	兼	〃	〃
任	1・8・20	大年神社	江津市渡津町	兼	〃	〃
任	1・10・1	八幡宮	浜田市下有福町	兼	〃	〃
免	1・10・14	八幡宮	大田市仁摩町	本	宮司	金築　正彦
免	1・10・14	石見八幡宮	大田市仁摩町	兼	〃	〃
免	1・10・14	八千矛山大國主神社	大田市仁摩町	兼	〃	〃
免	1・10・14	天満宮	大田市仁摩町	兼	〃	〃
免	1・10・14	大屋姫命神社	大田市大屋町	兼	〃	〃
任	1・10・15	八幡宮	大田市仁摩町	本	宮司	金築　弘明
任	1・10・15	石見八幡宮	大田市仁摩町	兼	〃	〃

任免	発令月日	奉職神社名	鎮座地	兼務	職名	氏名
任	1・10・15	八千矛山大國主神社	大田市仁摩町	兼	宮司	金築　弘明
任	1・10・15	天満宮	大田市仁摩町	兼	〃	〃
任	1・10・15	大屋姫命神社	大田市大屋町	兼	〃	〃
任	1・10・15	三宮神社	鹿足郡吉賀町	兼	宮司	末岡　正文
任	1・10・15	田中山神社	鹿足郡吉賀町	兼	〃	〃
任	1・10・15	三島神社	鹿足郡吉賀町	兼	〃	〃
免	1・10・17	八幡宮	出雲市斐川町	本	宮司	村上　家次
任	1・10・18	〃	〃	本	宮司	今吉　康子

新任神職紹介

田中愼一郎（たなかしんいちろう）

〔生年月日〕昭和五十一年十一月二十九日
〔住所〕島根県益田市木部町イ一一九三番地
〔奉職神社〕大日霊神社　祢宜
〔就任年月日〕令和元年八月一日
〔特技・趣味〕将棋
〔ひとこと〕この度、祢宜を拝命いたしました。田中愼一郎です。より一層気を引き締め神明に奉仕し、祭祀に勤しむと共に、氏子崇敬者の教化育成に努めてまいりたい所存です。

神職身分昇級

二級上　九月十日付発令

岩根神社宮司　二宮　正巳（江津）
伊努神社宮司　花田　光弘（出雲）
日吉神社宮司　金本　興義（出雲）

幽帰職神

益田市戸田町　小野神社　宮司　中島保胤
令和元年八月十七日　享年九十歳

飯石郡飯南町　由來八幡宮　宮司　景山健
令和元年九月十六日　享年八十九歳

浜田市長浜町　天満宮　権祢宜　牛尾安秀
令和元年十月十三日　享年八十八歳

謹んで哀悼の意を表します。
島根県神社庁長　角河和幸

庁務日誌

（令和元年7月～9月）

7月4日　第45回鹿足郡敬神婦人会総会　於　太皷谷稲成神社
7月9日　大田市神社関係者大会　於　大田商工会議所（角河庁長出席）
7月12日　広報委員会
7月15日　飯石支部神社関係者大会　於　掛合交流センター（佐草理事出席）
7月18日　総務委員会
〃　神社関係者大会打合会
7月26日　神社庁安来支部総会　於　安来市さぎの湯荘（佐草理事出席）
7月28日　船通山記念碑祭・宣揚祭　於　船通山山頂
〃　出雲市神社総代会総会　於　出雲ロイヤルホテル（中田理事出席）
7月30日　国民精神昂揚研修会併三部合同教化会議
8月2日　階位検定講習会開講奉告祭並開講式　於　神社庁（篠田副庁長出席）
8月4日　神社庁能義支部総会　於　広瀬町富田山荘（後藤理事出席）
〃　石見部神職研修会　於　濱田護國神社（角河庁長出席）
8月10日　明治神宮本殿遷座祭遷御の儀　於　明治神宮神楽殿（角河庁長参列）
8月11日　明治神宮本殿遷座祭奉幣の儀　於　明治神宮神楽殿（角河庁長参列）
8月14日　階位検定講習会閉講奉告祭並閉講式　於　神社庁（角河庁長出席）
8月15日　松江護國神社終戦記念祭　於　松江護國神社（佐草理事参列）
〃　濱田護國神社追悼慰霊祭並平和祈願祭　於　濱田護國神社（篠田副庁長参列）
8月14日　階位検定講習会開講奉告祭並開講式　於　神社庁（角河庁長出席）
8月21日　監査会
〃　役員会
8月21～22日　天皇陛下御即位奉祝記念第64回広島県神社関係者大会　於　広島県立文化芸術ホール（角河庁長出席）
8月23日　第46回島根県敬神婦人会石見部会総会　於　浜田市鈴蘭別館（角河庁長出席）
8月24日　令和元年度国民精神昂揚神職夏季練成講習会（出雲部教化委員会）於　神社庁
8月25日　神社庁益田支部関係者大会　於　サンパレス益田（角河庁長出席）
8月26日　島根県女子神職会総会　於　神社庁（金築参事出席）
8月27～28日　中国地区神社庁教化会議　於　鳥取県（牛尾教化委員長、錦田研修所講師、和田主事出席）
〃　第70回神社本庁教誨師研究会　於　東京（吉岡教誨師出席）
8月29日　階位検定講習会閉講奉告祭並閉講式　於　神社庁（篠田副庁長出席）
9月2日　第37回神社本庁神道教学研究大会　於　本庁（石原研修所主任講師、錦田研修所講師出席）
9月3日　天皇陛下御即位奉祝第62回山口県神社関係者大会　於　山口県総合保健会館（角河庁長出席）
〃　第43回島根県神社総代会石見部会総会　於　物部神社（篠田副庁長出席）
9月7日　島根県氏子青年協議会定期大会　於　伯太町わかさ会館（後藤理事出席）
9月8日　旧八東郡出身戦没者慰霊祭並八東郡神社関係者大会　於　鹿島文化ホール（佐草理事出席）
〃　島根県敬神婦人会出雲部会総会　於　佐田町ゆかり館（篠田副庁長出席）
9月9～10日　中国地区神社庁祭式講師研修会　於　岡山県（今井県祭式講師、森県祭式助教出席）
9月12日　第70回全国敬神婦人大会　於　広島市文化交流会館（角河庁長出席）
9月14日　第71回島根県神社関係者大会　於　出雲市民会館（950名参加）
9月16日　神宮大宮司御招宴　於　神宮会館（角河庁長、武田出雲支部長、和田主事出席）
9月17日　神宮大麻暦頒布始祭　於　内宮神楽殿（角河庁長、武田出雲支部長、和田主事参列）
〃　神宮大麻暦頒布秋季推進会議　於　神宮会館（角河庁長、武田出雲支部長、和田主事出席）
〃　伊勢神宮崇敬会地方本部事務局長会　於　神宮会館（和田主事出席）
〃　神社庁長懇話会　於　神宮会館（角河庁長出席）
〃　皇學館大学御招宴　於　志摩観光ホテル（角河庁長、和田主事出席）
9月18日　神社庁長会　於　神宮司庁（角河庁長、和田主事出席）
〃　「皇室」普及委員会　於　神宮司庁（角河庁長、和田主事出席）
〃　臨時班幣式　於　神宮司庁（角河庁長、和田主事参列）
9月19日　教化委員会出雲部会前期総集会
9月24日　正・副庁長会
9月25日　神宮大麻暦頒布始奉告祭
〃　支部長会
〃　二級上伝達式
9月26～27日　令和元年度神社庁祭式講師研究会　於　本庁（森県祭式助教、野上県祭式助教出席）
9月27日　神社総代会出雲部会評議員会

社☆ガール通信

10年に1度のホーランエンヤを堪能しよう

10年に一度の日本三大船神事「松江城山稲荷神社式年神幸祭」通称「ホーランエンヤ」。

今回社☆ガールは7日間にわたるお祭りの初日「渡御祭」を堪能しました。このお祭りは松江城山稲荷神社の御心霊を神輿にうつして、10キロ離れた阿太加夜神社に船で運んで五穀豊穣を祈るものです。

令和最初の船神事の日、社☆ガールも城山稲荷神社から神輿で運ばれる御心霊をお迎えいたしました。その後、神輿行列にはついていかず、人ごみを避けるように大橋川へ。松江大橋到着時、開始前にもかかわらず既にすごい人!!人の頭の上から擬宝珠は見えるのですが、船は見えず。数人ずつに分かれ、人の合間を縫って船神事が見える位置を確保しました。脚立を持っている人が交代で見せてくれたり、「ここ、空いているからどうぞ」と声をかけてもらい前の方で見ることができたり、観客の譲り合いが嬉しかったです。

これだけの観衆のなか、地声でのホーランエンヤの唄や掛け声がとてもよく響き、心が震えるよう。橋のちょうど真ん中に赤いテープで印がありました。神道と書いてあり、一番テンションが上がった瞬間でした。

ホーランエンヤの見どころは、やはり5つの地域(五大地)が出す櫂伝馬船(かいでんません)です。どの船もとてもカラフルで船首には男踊りの「剣櫂(けんかい)」、船尾には女踊りの「采振り」が華麗におどり、「ホーオラーンエーンヤ、ヨイヤーサーノサー」という音頭取りの歌に合わせて櫂方(かいかた)が櫂を漕ぎます。370年続く伝統です。代々踊りを少年が務める馬潟、もっとも住民が少なく「伝承人」と呼ぶ地区外からの協力者を募る矢田など、少子高齢化で後継者不足に悩む地域が多い中、今回の櫂伝馬船も見事でした!

午後からは場所を松江市朝酌の矢田の渡船場に移動し、矢田の渡し船の上で目の前に通る船団を堪能しました。船団が通るたびに船が大きく波打ち、一緒に祭りに伴走しているような臨場感でした。船団に見守られるようにやってきた神輿船を皆で拝ませていただき、10年に一度のありがたさをかみしめた社☆ガールメンバーでした。

寄稿

参宮旅行との出会い

出雲市平田町　大島伸明

この度、神社庁教化委員会出雲部会主催の参宮旅行について寄稿するよう要請をいただきました。文才浅き者が大役を仰せつかりましたが、何卒ご寛容下さいます様。私は一畑トラベルサービスに三十年間在籍、昭和五十一年より出雲部会の参宮旅行に関わらせていただいた大島と申します。私事で恐縮ですが、この六月末で五十一年の永きにわたる一畑での会社人生に終止符を打ちました。トラベルサービスを退いた後も何らかの形で参宮旅行と関わりを持ち続け、振り返ってみれば、まさに参宮旅行とともに歩んだ会社人生であったように思います。

この度、このような機会をお与えいただいたことに感謝申し上げ、総括の意味を含め、記憶の糸を手繰ってみたいと思います。

それは出雲市大津町、阿須利神社の先代宮司、江角誠先生との出会いから始まりました。昭和四十九年だったと思います。当時、出雲市の駅通りにあった、一畑トラベルの事務所にひょっこりご来社になり、たまたま応対させていただいた私に「神社関係者三〇〇名程で津和野に行きたい。ついてはバスと宿を頼みたい。」とのお話でした。一通り話が終わった後、

・江角先生「ところで大島さん、あんたのところは臨時列車はできーかね？」とのお言葉。

・私「任せてください！どちら方面ですか？」

そんなやりとりであったと思います。

数日後、再びご来社。「会議の結果、次回の参宮旅行はトラベルさんに決まったよ。宜しく頼んます。」六輌編成、四八〇名のビッグツアーの受注に、二十代前半の駆け出し営業マンであった私は喜びと同時に、本当に出来るのかという不安が交錯。一人で祝杯を挙げたものの、何かしら複雑な気分であったように記憶しております。当時、臨時列車の「り」の字も知らない私と所長は「とにかくやるしかない！臨時列車の申請の仕方を聞かねば」ということで（当時の）国鉄米子鉄道管理局へ教示をいただきに。申請後もなかなかOKの返事が来ず、焦りと不安の日々が続きました。私が神社庁様から旅行のご縁をいただく前に六回他社で実施されておりますが、当時は必ずしも神宮に限定されたものではなく、他方面にも足を伸ばされたと伺っております。

七回目が私にとって初回ということになります。昭和五十一年の「南紀一周の旅」は往復夜行列車、宿は勝浦温泉「ホテル浦島」、現地は「大阪ヤサカ観光バス」十二台という大団体。

関係各位のご協力で、何とか無事終えることが出来ましたが、四十年以上経った今でも緊張の連続であった当時の情景や思いは、強烈に脳裡に焼き付いております。

翌年も同様に臨時列車を利用しましたが、やや集客に苦戦。それでも国鉄には列車代の九割を支払わねばならず、私の方から「来年は全行程貸切バスにしましょう。集客できた台数でやればいいわけですから。」と進言申し上げ、五十三年は貸切バスを利用することになりました。結果二二三名、六台という、これまでの半数に減少。反省会の結果、「やはり毎年実施することには無理がある。隔年にしよう」ということになり、五十四年は見送りとなりました。ところが「やっぱり寂しい。少数でもいいから毎年実施しよう」という声が上がり、翌五十四年から再開することになった次第です。

年を追うごとに参加者が増え続け、平成元年から二班編成に、また平成八年からは夜行を取りやめ、旅館二泊という現行の形になりました。

永い歴史の中で特に印象深かった事は、前々回の式年遷宮の翌年、平成六年の旅行です。一時、一、〇〇〇名を超える申し込みがありましたが、キャンセル等もあり、結局

九七九名、二十五台の貸切バスを利用しての大団体となりました。（十二台と十三台に分けて）その年は大神神社、石上神宮へお詣りしましたが、一番頭を悩ましたのはトイレの問題でした。休憩予定の西名阪、香芝ＳＡは何時行っても大型トラックなどで埋め尽くされており、とても一度に十二台ものバスを乗り入れることは不可能です。そこで宿の出発を十五分間隔の三班に分けて出発することにし、何とか事なきをえました。泊りは滋賀県の琵琶湖グランドホテルでしたが、五〇〇名近くの宴会は実に壮観でした。

旅行のチラシを作る前に必ず下見に出かけますが、チェックポイントは、まずお詣りする神社のトイレの数、そして写真撮影の予定がある場合、お客様が散らばらないよう、事前に用を済ませておくパーキングやサービスエリアの選定、正式参拝の場合の雨天時の対応など多岐にわたります。何分小回りがきかない大団体ですから、少しの判断ミスが大きな混乱を招きかねず、勿論事前に行程を丹念に調べ、団体の動きをイメージできた上で本番に臨みますが、それでも予想もしない出来事に遭遇することもあります。

毎年雨や雪を心配しますが、不思議なことに雨に祟られ困ったことは数えるほどしかなく、また天気予報では雨になっていても現地に着くと止んだり、傘の判断に迷うような事が多かったように思います。

なかでも平成二十三年三月十一日の東日本大震災。私は同行致しておりませんでしたが、第二班が神宮参拝を終え、昼食を済ませ、次の宿、長浜方面を目指して走っている時に発生しました。太平洋岸一帯に大津波警報が発令されたのは記憶に新しいところですが、前日の鳥羽のホテルは足元まで海。深夜に発生していたら大変なパニックになったことでしょう。もし前日であれば途中から引き返すことになっていたのかもしれません。

今年三月の第四十九回終了時点で、延べ六六四台のバスが動き、二四、九六九名の皆様を神宮へご案内申し上げたことになります。急病人の発生等は何度かあったものの、承知する限り事故らしい事故は無く、「神のご加護をいただきながらこの団体は動いている」、回数を重ねる毎にその思いが強くなってまいりました。

これまでに実に多くの宮司様、総代会関係者の皆様にお世話になりました。紙面をお借りし、改めてお礼申し上げます。また国民の総氏神である神宮に、仕事とはいえ、永きにわたりご縁をいただいたことを幸せに思います。

拙文、ご容赦賜りたく、また思い違い等がございましたら、昔の事ゆえ何卒ご寛容下さいますようお願い申し上げます。

鹿足支部だより

吉賀町柿木村下須地区には、五百年にわたって受け継がれてきた伝統行事「萬歳楽」があります。古記録には明応七（一四九八）年、下須地区の農家九戸が集まって、五穀豊穣・家内安全を祈ったのが始まりと記されています。この祭りの席上で榊と白扇を持って、「まんざいらく」「まんざいらく」「まんざいらく」と九回唱えながら舞うところから、「萬歳楽」の名前が付けられたといわれています。

平成二年五月には、無形民俗文化財として島根県の指定を受けており、希少性の高い民俗行事です。

祭事は毎年十二月の最初の土曜日から二日間にわたって、幣くじによって決められた当屋（祭事を受け持つ家）で行われます。

一日目は〝よどの日〟と言われ、早朝から餅をつき夜明けまでにつき終えます。昼前からの神事に続いて、餅食いの行事が行われ、丑の刻には村の氏神田中山神社に参拝します。丑の刻は午前二時頃となりますが、今では時刻を早め午後三時頃には行います。二日目は〝ひのはれの日〟と言い、祭典に続いて「三献の儀」、「飯食い」、「萬歳楽舞」などが行われますが、高さ四寸ぐらいに盛られた大盛りのご飯を食べる「飯食い」と、食べ終えた椀をお客と接待者が奪い合う「椀かくし」が行われるとき、この祭りは最高潮に達します。椀を取られるとご飯がよそわれる、そうされてはかなわないから取られまいとして椀を隠し、もみあい重なり合いになるという具合です。

「椀かくし」が一段落すると、その後翌年の当屋を決める神事などがあり、いよいよ「萬歳楽舞」がはじまります。舞といっても、座ったままで右手に白扇、左手に御幣をつけた榊を持ち、あおぎ上げるように手を交互に上下しながら、少し訛った「まんざいらく」を三回唱えながら、最後は榊を白扇で打っておろすことを三度繰り返します。はじめに神職が自座で行い、次いで株舞と称して各組から三人ずつの計九人が次々と座敷の中央に進み出て神前に向い行います。その後客舞、最後に舞渡し舞受けと言って、新旧の当屋が並んで行います。

かくして「萬歳楽」は万事を終え、神幸して新当屋へ向かいます。五百年にわたる「萬歳楽」はこれからも受け継がれていきます。

参考文献：
柿木村誌ほか

編集後記

奥出雲の山中に「よりんさん」と呼ばれる巨木がある。出雲大社と万九千神社を結ぶ線上にあり、神在月に出雲大社に行き来される八百万の神々がお立ち寄りになると伝えられている。周囲四メートル、高さ三十メートル超で、三メートルほどの高さの所から六、七本に幹分かれして屹立している。まさに神々の寄り集うご神木と呼ぶにふさわしい。

祖父は生前、神等去出祭の翌朝、拝殿で太鼓をたたいていると、木枯らしに混じって天空をお渡りになる神々のざわめきが聞こえてくると、よく言っていた。中高生の頃は、人知人力によって解決できないことはないというような僭越があったのだろう。ただの自然現象だと一笑に付していた。目には見えないものへの驚異とか、畏怖といった感情を否定する近代合理精神にどっぷり浸かっていたからであろう。

しかし、歳を重ねるにつれ、自然は人智によって分析され、解明し尽くされるほど浅薄なものではないと実感するようになった。大きな自然の命に触れることによって神々を感じ、その声が聞こえるのだろう。そうであって初めて、私たちの生は、奥行きをもつものとなるはずである。（陶）

島根県神社庁報〈第三四四号〉
発行日　令和元年十月二十五日
発行者　島根県神社庁
編　集　広報委員会
委員長　長谷川正矩　委　員　宮能　壮充
副委員長　陶山　浩正　委　員　江角　恵
委　員　石﨑　彰矩